Vol.209　近江商人に学ぶこと　（平成23年6月10日）

つい先日奈良から三重・滋賀への旅の途中、近江商人を生んだ近江八幡へと残る面影を訪ねてみました。

この辺りは戦国古戦場で知られ、湖岸には北から浅井の小谷城から秀吉の長浜、三成の佐和山、井伊の彦根、信長の安土、秀次の近江八幡山、三成の坂本城と限りなく城跡があります。合併して現在は近江八幡市となっておりますが、琵琶湖東の安土城址を中心とした市であります。かつて関白秀次はこの小高い標高300メートル位の八幡山に城を築き、外堀は琵琶湖まで５キロの掘割でつなぎ、京都への航路を拓いた。城下町は戦国時代築城には珍しく、城へ向かって真っすぐな広い道路が作られて居ります。戦国時代の城への道は紆余曲折して敵の突入を防いだのでありますが、秀次は信長の楽市楽座を手本として焼き落ちた安土城下の町を近江八幡へ移転させて、ここを府中として近江商人発祥の基を作ったのであります。

今でも残る商家は当時の豪壮巨大な商財力を偲ばせる素晴らしい建物が続いております。各家がこけら葺に卯建作りは他に類例のない旧家作りでありました。

特に素晴らしかったのは、入口のすり揚げ戸をはじめとした戸作りであります。この頃の建築技術はすでに世界一流だったのではと思いました。城堀は数年前埋めて駐車場にしようと市民の意見が一致したが、たった一人後世の人達への歴史遺産は残すべきだと反対し、市民が納得。

今日ではかけがえの無い景勝として観光の名勝となり、鬼平犯科帳など時代劇のロケーションに欠かせない存在となっている様です。

近江商人が何故栄えたのかの理由の一つに、この町の中心地、明治１０年に造られた「白雪館」と言う学校があります。

明治初期、この在校生は女性１１７名、男性１１５名、当時の風潮からはとても考えられないバランスであります。この頃はまだまだ一般の女性は学校へ行って勉強する時代では無かったからでありますが、近江ではここの商いの特徴として、男達は全国へ行商して歩くか、大阪、京都、日本橋へ出店を持って全国販路を築くと言う壮大な気宇を持っていたと思われます。

近江商人の家訓は「売り手良し、買い手良し、世間良し」でしたが、その商才の上手さと凄さから妬まれて「近江泥棒、伊勢乞食」と蔑される面もあった様です。

こうして男性達は北は北海道まで足をのばしておりましたので、家は女性達が切り盛りし守る為に早くから女性達の教育に熱心だった様です。近江商人の全国展開した大当番仲間制度はいわば現在のチェーン店のはしりであります。近江商人達の歴史は現代に通ずるものであります。少子高齢化、過剰過密の格差都市と、地方経済をどう克服して次の世代を切り開いて行くかと思う時、近江商人の様に家業は奥さんに任せて、男達は首都圏の大消費地へと新しい出店を目指すべきであります。全国の街道を眺めれば福島では桃を、山形、山梨はさくらんぼやブドウを、九十九里はとうもろこし、丹波では枝つきの黒豆と季節を賑わせております。君津街道もフルーツ街道が出来るまでは私達の手で街道を賑やかしたいものです。